会報　高鷲の文化財
第９１号
令和６年１２月１７日発行
高鷲文化財保護協会
題字：麦島　博昭　氏

高鷲文化財講演会

『鷲見氏』
講師高橋教雄氏
（郡上市文化財保護審議会委員長）

令和６年 12 月７日（土）午後２時から４時まで「たかす町民センター研修室」で、郡上八幡文化財保護協会会長・郡上史談会長・大乗寺住職の高橋教雄先生に講演をしていただいた。この講演は鷲見氏関連事業として開催されたもので、聴衆は高鷲文化時保護協会員や大和町及び白鳥町からの参加もあり、約 30 名の聴衆がありました。

最初に西脇会長から高鷲文化財保護協会が現在進めている活動の報告があり、続いて高橋氏の講演が始まりました。講演内容は次の通り要約と疑問点をまとめました。

・高鷲という地名

高鷲という地名は、明治 22 年に、鷲見・大鷲・鮎立・西洞の 4 ヶ村が合併して成立した村で、長良川の上流と鷲見川の源流に沿って展開している山村である。その中で『鷲』の字を「ス」と言うが、「ジュ」と呼ぶと辞典には書いてある。鷲をスと言う名称は、白山信仰からきている。そして大日岳信仰は美濃側の白山信仰の始まりで、高鷲という名称は法華経つまり天台宗から付けられた。その原点は、立石で高鷲の地名の原点であり、近くの大屋という地名は、白山信仰の拠点を表している。また鮎走という地名は、アユバシリといい、鮎は始まりという意味で、古来より鮎で占いが行われ、そのはじまりであった。

・鷲見郷について

斉衡 2(855)年、美濃国多芸・武儀両郡を分けて多芸・石津・武儀・郡上の 4 郡が成立した。和名類聚抄には全国の郷名が載っており、郡上には「群上、安群、和良、栗原」の４郷から成り立っている。大化以後、幾多の村邑を統合して里と呼び、後に改めて郷といった。郷内の多数の旧村は改めて里と呼ぶようになった。丁度その頃、鮎走、切立、正ヶ洞、向鷲見、中切、穴洞、西洞、鷲見の八か村を号して鷲見郷というようになった。この 8 ヶ村を鷲見と慣用することは、明治の中頃まで続いた。

郡上では 11 世紀後半に吉田庄・気良庄、12 世紀後半に山田庄が成立した。またこれらの庄は皇室院領や国衙領であった。鷲見郷は山田庄の一部と高橋氏は述べているが、筆者は疑問に思う。

・鎌倉時代の鷲見氏成立

小川休和の「濃北一覧」・硲氏所有「鷲見大鑑下」・鮎走区所有文書「鷲見大鑑」には鷲伝説のことが書いてあるが、それを比較すると表現がそれぞれ違う。「鷹」は地位を示すもので、税の代わりや祝いの印に送ったものである。そして鷹司は地位の高い人をあらわしている。また山口才三郎は修験者であると位置づけているが、木地師ではないか研究の余地がある。

また鷲見氏は重保の時、所領を安堵されているが、地頭ではなく、その子の家保が承久の乱で活躍した功績から地頭に任命されており、向鷲見城を造ることを許可された。それまでの地位は在地武士の下司であり、在京の上司に対する下級荘官である。重保から 6 代忠保までは主として芥見庄長山に居住していたる。

・建武の新政時代の鷲見氏

元弘 3(1333)年足利尊氏の六波羅攻撃に従軍して軍功を上げた鷲見忠保(ただやす)は、建武 2(1335)年尊氏が武家政治の再興を図って後醍醐天皇に反旗を翻したときも、足利尊氏について各地を転戦して軍功を上げている。南北朝時代に入り、足利尊氏と直義兄弟が対立した観応の擾乱に際しては忠保の弟、鷲見保憲が直義の招きに応じたのに対し、忠保の子の加賀丸は守護の土岐氏に従って尊氏方につき、一時鷲見氏は一族で敵対することになった。明徳 2(1391)年の明徳の乱の時、幕府が美濃の守護土岐康行を討伐しました。その時鷲見加賀丸は軍功を賞されて鷲見郷河西・河東の地頭職を安堵されています。このころが鷲見氏の全盛で鷲見氏の所領は、鷲見郷の外、東前谷、牛道郷の一部、越前穴馬の一部に及んだ。

なお、ここでいう河西は大日ヶ岳、河東は鷲ヶ岳や白尾山を含む白山信仰圏の始まりで、大日ヶ岳信仰圏が中心であると講師は述べられたが、疑問である。

・室町時代の鷲見氏

14 世紀頃には鷲見氏は衰えはじめ、二日町城主安東三郎氏世などが鷲見郷をおし取ろうとする事件が起り、鷲見氏保が安東軍をしりぞける。

その後鷲見氏は、篠脇城主東氏に従属するようになり、上剣の阿千葉城に居城させられたが、天文 10(1541)年鷲見貞保の時、東常慶に攻撃されて阿千葉城の鷲見氏は滅んだ。阿千葉城主鷲見貞保の墓ではないかと言われているところが中津屋の国道 156 号線沿いにある。また、1585 年には天正の大地震が起こり、折立地区陥没し現在のようになる。　その後鷲見城主鷲見兵庫は八幡城主遠藤盛数の家来となり、兵庫の子忠左衛門は遠藤慶隆に仕えて、慶長 5(1600)年の八幡城の戦いで愛宕にて戦死した。

・その後の鷲見氏

その後鷲見城は廃城になったが、一族は伝右衛門と名乗り、鷲見郷の穴洞村で帰農し現在まで続いている。右写真は高鷲の鷲見氏が建立した高鷲鷲見氏の墓碑である。

またそれぞれ分かれたの子孫が各地で活躍している。

・聴衆の感想

聴衆からは下記のような感想が聞かれた。

①内容が難しかった。

②話が飛んで途中で分からなくなった。

③鷲見城の話が聞けると思ったが、鷲見城の話がなかった。

④質問が一人に片より、疑問に思ったことが聞けなかった。

その他多数